

# ローマ元首政期小アジアにおける見世物と都市

——アフロディシアスの事例を中心として——

増 永 理 考

【要約】 本稿は、元首政期ローマ帝国下の小アジアで増加した、競技祭としての見世物の分析を通して、当該期におけるギリシア都市の実態に迫る。とりわけ、都市アフロディシアスを事例とし、碑文史料に基づき既存の「ギリシア風競技」と剣闘士競技に代表される「ローマ風競技」との関係性を問う。まず、同市の見世物に集う人々の実態を確認した上で、他都市に赴く「ギリシア風競技」の競技者に対する顕彰碑文を検討し、同競技を都市間競争という地域的文脈に位置づける。そして、同競技における皇帝を主とするローマ中央との関係を示唆する要素、および剣闘士競技自体も、ローマの権威を付与する点で都市間競争に寄与していたと考える。結果として、「ギリシア風競技」と剣闘士競技は、ともに見世物として都市間競争という文脈において、ローマ中央との関係を構築する機能を共有していたことが判明し、見世物からみるギリシア都市の新たな像の一端が提示される。

史林 第九八巻二号 二〇一五年三月

## はじめに

現在のトルコに相当する小アジアは、ローマ帝国内の一地方であり、いくつかの属州として統治されていた。ギリシア文化圏に属するこの小アジアは、とりわけ元首政期の帝国において最も繁栄していた地域の一つに数えられる。現存する建築物の遺構や硬貨、そして碑文などに基づいて、現在に至るまで多くの研究が蓄積されている<sup>①</sup>。その繁栄の証拠の一つ

として、小アジアは帝国内において、競技祭として催される見世物が盛んな地域であったことが知られる。特に紀元二世紀から三世紀にかけて、各地で競技祭が劇的に増加していることが史料から確認され、多くの都市が古い競技祭を復活させ、あるいは新しい競技祭を創設していった。この現象を最初に指摘したフランスの碩学L・ロベールは、これを「競技祭の爆発」と名づけている<sup>②</sup>。しかし、彼はこの現象を指摘するにとどまっておらず、なぜこのような現象が生じたのか、あるいはこの現象がいかなる意味を持ったのかという点については十分な説明を与えていない。

かかる現象に説明を与える先行研究の一つが、いわゆるエヴェルジュティスム論を用いたものである。P・ヴェーヌによつて主唱されたエヴェルジュティスム論は、一般的に都市の有力者が不特定多数の都市民に対して、権威の正当化などを目的に、公共建築物や見世物などの恵与行為を行っていたとする分析概念であり、古代世界に広く共通する現象として位置づけられる<sup>③</sup>。近年、A・ツァウダーフークは、元首政期小アジアで増大した見世物を含む恵与行為は、都市内部における有力者の階層化や寡頭化が進行する中、彼ら自身の支配を正当化することに寄与していた、と主張する<sup>④</sup>。エヴェルジュティスム論は恵与行為を前提とするため、必然的に贈与者としての有力者、受益者としての都市民という対比構造を想定する。しかし、見世物という恵与に関して、贈与者は同時に受益者としての観客になるという側面がある以上、エヴェルジュティスム論に依つては見世物の実態を見落とす可能性がある。そのため、本稿では分析手法として思弁的側面が強いこの観点を採用しない。

小アジアでの見世物は、ツァウダーフークが分析した都市内部における問題のみならず、帝国全体における問題としても看過することはできない。というのも、見世物に対するローマ皇帝や中央政府の関与に加え、見世物そのものに関して、新たなローマ風の要素がギリシア世界にもたらされていたのである。したがって、都市という枠組みにとどまり、議論の幅を狭めぬためにも、帝国全体というより大きな文脈にまで眼差しを向けることが重要であると筆者は考える<sup>⑤</sup>。近年、ローマの支配下に入ったギリシア都市は自立性を失い、衰退の一途をたどったという一般的な見方が多方面から見直され

⑥ している。こうした近年の研究動向を踏まえつつ、本稿ではギリシアとローマの交差点としての見世物を分析することを通して、ローマ期におけるギリシア都市の実態を解明するとともに、ギリシアとローマの接触のあり方に迫ることを試みる。

※ 史料や欧語文献の略称は、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary* 4<sup>th</sup> ed. Oxford, 2012. 44-45 のエントリ、サート・L'année philologique (<http://www.annep-philologique.com/>) に掲載されたもの原則に従ったが、慣例に倣ったものもある。また、注において複数回言及される文献は、初出のものに限りその書誌情報をすべて表記するが、それ以降に同じくは【著者名】【出版年】/【ページ数】という形式で記す。

- ① ローマ期における小アジア全体に関する研究は枚挙にいとまがなく、ここでは、D. Magie, *Roman Rule in Asia Minor to the End of the Third Century after Christ*, Princeton, 1950; S. Mitchell, *Anatolia: Land, Men, and Gods in Asia Minor*, vol. 1: *The Celts in Anatolia and the Impact of Roman Rule*, Oxford, 1993a; Id., *Anatolia: Land, Men, and Gods in Asia Minor*, vol. 2: *The Rise of Church*, Oxford, 1993b; M. Sartre, *L'Asie Mineure et l'Anatolie, d'Alexandre à Dioclétien* (I<sup>re</sup> s. au J.-C. -III<sup>e</sup> s. ap. J.-C.), Paris, 1995 を挙げておく。
- ② L. Robert, "Les concours grecs", 8<sup>e</sup> *Congrès international d'épigraphie Athènes* 1982 (1984), p. 38.
- ③ P. Veyne, *Le pain et le cirque: sociologie historique d'un pluralisme politique*, Paris, 1976, pp. 20-29.

④ A. Zuiderhoek, *The Politics of Munificence in the Roman Empire: Citizens, Elites and Benefactors in Asia Minor*, Cambridge, 2009, pp. 150-153. この著作の内容を論点に絞って、拙稿(書評)「Zuiderhoek, A., *The Politics of Munificence in the Roman Empire: Citizens, Elites and Benefactors in Asia Minor*, Cambridge, 2009」【西洋古代研究】二二二・二〇一二年、六三二-六九頁も参照されたい。

⑤ この点は、近年、本邦において指摘されている研究の「タコソバ化」に関する議論を踏まえている。徹視的な視点に終始するのではなく、多くの人々に共有される巨視的な問題を提示するところや、今の西洋古代史研究が取り組むべき課題の一つである。南川高志編「フォーラム 古代史研究から見た西洋史学の将来：桜井万里子・尾崎千編『古代地中海世界のダイナミクス』(山川出版社刊)を素材として」【西洋史学】二四〇(二〇一〇年)・三三三-三三七頁を参照。

⑥ ここでも、G. Salmeri, "Dio, Rome, and the Civic Life of Asia Minor", in S. Swain (ed.), *Dio Chrysostom. Politics, Letters and Philosophy*, Oxford, 2000, pp. 53-92; A. Zuiderhoek, "On the Political Sociology of the Imperial Greek City", *GRBS* 48 (2008), pp. 417-445 を参照された。

## 第一章 先行研究、および問題の所在

## 第一節 ローマ期のギリシア都市における見世物の枠組み

ギリシア都市は、かつてW・ブルケルトが述べたように、「祝祭共同体 Festgemeinschaft」であったことは多くの研究者によって認められている<sup>①</sup>。基本的にこの祝祭は、都市の守護神の神域から神々の像などを運んで都市をめぐる行列、牛などを神々に捧げる犠牲式、そして競技祭の三つで構成されている<sup>②</sup>。この三つ目の競技祭こそが見世物に相当するものである。このように原則としてギリシア都市での見世物は宗教行事の一環であった。

この見世物自体は、演劇や音楽の競演、そして運動競技を含むギリシアの伝統的競技(本稿ではこれを「ギリシア風競技」と総称)と剣闘士競技を主とする「ローマ風競技」に大きく二分される。さらに、「ギリシア風競技」も「神聖な冠付競技」と訳される *“lepoi kai stegavirai agavēs”* と賞金獲得が主要となる *“theudēc”* に大別することができる<sup>③</sup>。特に前者は名誉が伴うものであり、古典期以来の伝統を有するオリュンピア祭やピュティア祭などがこれに含まれる<sup>④</sup>。これらにおける勝者には葉冠が授与されるとともに、母市に凱旋入場する権利や、他の競技祭において特別席に座る権利なども与えられた<sup>⑤</sup>。しかしながら、ローマ期においては名誉とともに賞金が与えられる場合もあるので、必ずしも両種の競技を厳密に分類できるとは限らないということには注意すべきである。

一方、ギリシア都市における、剣闘士競技を主とする「ローマ風競技」は、「ギリシア風競技」に比べるとその伝統は浅い(以下、「ローマ風競技」は剣闘士競技を指すこととする。野獸狩りも「ローマ風競技」とみなされうるが、関連史料が希薄であることを考慮して、本稿では考察の対象から除外する)。イタリア半島に起源を持つ剣闘士競技がギリシア世界において初めて開催されたのは、前一六六年、アンティオキア近郊のダフネとされる<sup>⑥</sup>。小アジアでも前六九年、エフェソスでの開催が確認

される。<sup>⑦</sup> その後も同競技は広範な地域で人気を博していき、紀元二世紀から三世紀がその全盛期であったようである。<sup>⑧</sup> 「ギリシア風競技」同様、剣闘士競技も天罰の神ネメシスなどと関連し、世俗的とされるローマ市における競技に比べ、宗教的要素を多分に含んだ見世物として位置づけられている。<sup>⑨</sup>

## 第二節 研究史概観、および考察課題

ローマ帝国下のギリシア都市における見世物に関する研究史を概観すると、研究の対象も主に「ギリシア風競技」と「ローマ風競技」に二分されることがわかる。

ではまず、「ギリシア風競技」に関する研究から整理しよう。初期の動きとして、一九四〇年、A・H・M・ジョーンズによる同競技に関する概説的研究<sup>⑩</sup>、および一九五〇年代にL・モレットイによる同競技に関する碑文集の出版<sup>⑪</sup>といった成果が挙げられるが、一九六七年、小アジア南西部の都市オイノアンダのC・ユリオス・デモステネスに関する碑文の発見は、研究が大いに進展する画期となった。<sup>⑫</sup> この長大な碑文には、競技祭の創設、および実際の競技祭の過程、そしてその責任者である競技監督官という役職に関する規定などが詳細に記されており、ギリシア都市における競技祭の実態がより鮮明となった。最初にこの碑文をもとに研究を行ったのがM・ヴェルレであり、デモステネスに関する情報から都市の制度に至るまで様々なトピックを精査している。彼は、ローマ期の競技祭は伝統的なギリシア文化やローマの権威に対する関係を強化するのに貢献していたと結論づけている。<sup>⑬</sup> この碑文を軸に、S・ミツチェルも分析を行っており、ローマ期のギリシア世界における競技祭の全体像を示そうと試みている。三世紀にかけての競技祭の増加は、それに先立つ建築ラッシュにみられるような都市のパトリオティズムやプライドが反映されたものであると彼は強調する。ローマ帝国の支配下、ギリシア都市では、皇帝を巻き込むほどに都市間の競争が激化していたと一般に指摘されており、詳細な検討はなされていないものの、ミツチェルもかかる元首政期の状況を念頭に置いているのである。一方、競技祭設立の承認や都市の

称号授与といった皇帝による「恩恵」施与は、苛酷な税徴収などの搾取を埋め合わせようとするローマ中央の政治的手段であるという支配者側の視点にも眼差しが向けられている。<sup>⑭</sup>

O・M・V・ナイフもまた、ローマ期のギリシア都市における競技祭の活況を主張し、特に都市有力者にとつての意義に着目している。有力者らは、ギリシアの伝統的な祝祭を用いることで、自分たちの社会的優位性を誇示すると同時に、ローマ中央にも意識を向けていた、と彼は述べる。とりわけ運動競技への参与は、ギリシア人としてのアイデンティティや社会的地位の高さを主張するのに有効であるとして、都市有力者にとつて、「ギリシア風競技」がいかに積極的意義を有していたかを強調する。<sup>⑮</sup>

近年では、Z・ニュービー、J・P・ケーニツヒが彫刻などの視覚資料と文学作品をそれぞれ用いて、ローマ期の運動競技、さらにはローマ帝国においてギリシア文化が担った様々な役割について論じている。彼らによると、皇帝による祝祭の促進や支持、ローマ市における運動競技組合の本部の設置などは、ローマ市や皇帝がギリシアの祝祭文化において中心的な地位を占めていたことを示唆していた。他方、ギリシア世界側にとつて、運動競技はギリシア文化の中心的象徴の一つであり、ギリシア人アイデンティティの形成に役立つものであった。両研究者はアプローチの仕方こそ異なれど、以上のような見解を共有している。<sup>⑯</sup>

以上のように、「ギリシア風競技」に関する先行研究では、どのようなアプローチを採用するにしても、中央としてのローマが介入を強め、次第に中心的な位置を占めるようになるも、ギリシア都市にとつて競技祭はギリシア的アイデンティティを強調するものとして重要である、という評価に概ね至っているといえよう。中でも、ローマ中央との関係については、皇帝崇拜の一環として、ローマによる支配という現実に対してギリシア人たちが順応していた証左であると理解することが定着している。<sup>⑰</sup> 果たしてこれはローマに対するギリシア都市の従属の証であろうか。本稿では、「ギリシア風競技」におけるローマとの関係について、ギリシア都市という文脈を十分に考慮した上で、その意義を改めて検討したい。

では、もう一つのグループである「ローマ風競技」、すなわち剣闘士競技に関する研究をみてみよう。初めて体系的研究を行ったのはL・ロベールである。彼は多くの剣闘士競技関連の碑文を提示し、ギリシア世界における同競技の拡大や制度について分析し、帝国東方において同競技は受容されなかったというL・フリートレンダー以来の説を否定している。<sup>18)</sup>

近年、M・J・カーターはロベール以降新たに発見された碑文史料を用い、彼のように剣闘士競技の存在を単純な「ローマ化」とみなすのではなく、帝政期を通して同競技にはギリシアの伝統的な競技の価値が付与され、ギリシア人たちが単にローマ的な慣習を採用したわけではないことを強調している。彼は主に競技の組織や剣闘士の地位などに焦点を当て、東方における剣闘士競技はギリシアとローマの文化的な接点として、両者の価値観の融合を見出せるものであると主張する。<sup>19)</sup> カーターの流れをくむCh・マンは、東方において剣闘士競技は、制度として「ギリシア風競技」に組み込まれなかったとしながらも、剣闘士の墓碑における表現などにギリシア的な特色を見出し、帝国西方とは異なるギリシア世界独自の普及、あるいは受容のあり方を明らかにしている。<sup>20)</sup>

以上、研究史を整理してきたが、「ギリシア風競技」と「ローマ風競技」に関して別々の研究史が形成されている点には問題があると筆者は考える。両競技の関係性について、近年の剣闘士競技研究の方で言及されるようになったが、蓄積のある「ギリシア風競技」の研究が大いに生かされている状況であるとはいえない。さらに、先に言及したケーニツヒは、両競技の間に緊張関係が存在したことすら強調している。<sup>21)</sup> 確かに制度面をみると両者は別物のように感じられるかもしれないが、両者を分け隔てることに關して説得的な見解を示している先行研究は管見のかぎり存在しない。実際、剣闘士競技を指すギリシア語は、一般に「*ἀγών, ἀγωνία, ἀγωνισμός*」であるが、まれに「ギリシア風競技」を指す「*ἀγών, ἀγωνία*」<sup>22)</sup> といっていた。加えて、この「*ἀγών, ἀγωνία*」というギリシア語の第一義は、「集まること」とされているのである。したがって、両競技は、共同体内外の人々が集い、一定の集団が形成されるといふ点を共通要素として内包していると考えられる。それゆえ、かかる見世物としての共通面を念頭に置きつつ、両競技をあわせて考察することで、ギリシアとローマの交差点とし



地図 小アジア南西部（筆者作成）※太字は地方名

て、従来の視点では解明されえない見世物の実態に迫ることが可能となるのである。

### 第三節 事例としての都市アフロディシアス

分析のための主たる史料は碑文となるが、小アジア全土にわたってそれらを検討することは筆者の能力を大きく超える。そこで本稿では、アフロディシアスという都市をケーススタディとして取り上げることとする。<sup>24</sup>以下、事例として同市がいかに有効かを、都市の略歴を概観しながら明らかにしていこう。

アフロディシアスは小アジア南西部、マイアンドロス川の南に位置する都市である。この都市はその名が示唆する通り、女神アフロディテ崇拜の中心地であり、その聖域を中心として前三世紀ごろから共同体が形成されたと推測されている。<sup>25</sup>前一世紀初頭、同市は小アジアで展開されていたミトリダテス戦争において、ローマを終始支持、援助している。その貢献がローマによって認められ、また、ユリウス家の祖先とされた女神ウエヌスと女神アフロディテが同一視された結果、同市には前三九年の元老院決議によって、税金の免除、自治



の承認、ローマ市における見世物での優先席など様々な特権が付与された<sup>27)</sup>。帝政期に入ると、アフロディシアスは公共建築物の建設によって都市化が進展し、大いに繁栄をみている。都市内部には、劇場、競技場、そして皇帝の神殿などが相次いで建設され、ローマ期におけるギリシア都市の典型的な様相を呈している<sup>28)</sup>。同市は三世紀半ばごろまでに、カリア地方の中心都市となり、ディオクレティアヌス帝による属州再編時には、属州カリアの州都に定められた<sup>29)</sup>。

このようにアフロディシアスは共和政末期からローマとの友好関係を築き、その恩恵もあつて帝政期にかけて繁栄していることから、ローマの影響を大いに受けた、ローマ期を代表する都市といえるだろう。都市自らも、J・レイノルズが「アーカイヴ壁」と名づける、皇帝の手紙などからなる碑文群を二世紀から三世紀にかけて劇場に設置し、ローマとの関係を強調していた<sup>30)</sup>。前節でも述べたように、剣闘士競技などローマの要素を考慮する以上、ローマとの関係は無視することはできず、この点でも本稿における考察に適した対象である。

一方、前述の前三九年の元老院決議によって、アフロディシアスには特権として様々な自由が保障され、ローマの役人らによる直接的介入は他の都市に比べて少なかったこともまた大きな特徴である。すなわち、他都市に比べ、アフロディシアスにおけるローマの影響は都市側によって積極的に摂取されたと考えられる。このように都市に一定の自由が保障されていたという点で、同市に着目することは、ギリシア都市にとつてのローマの存在意義を問うという本稿の目的に適うものである。

史料の残存状況に関しても、現在までに発見されている碑文はアフロディシアス全体でおよそ二〇〇を数え、小アジアの中でも随一の量を誇っている。特に、見世物に関する碑文の数は他都市に比べ顕著であり、帝政後期についてであるが、すでにCh・ルーシエによって研究がなされている<sup>31)</sup>。彼女は、帝政後期の都市においてパフォーマー集団や彼らを支持する党派集団がいかに重要な役割を担ったかを解明しているが、元首政期の状況に関しては、当該期の史料をその補遺において整理しているのみで、詳細な検討を行っていないわけではない。それゆえ、元首政期のアフロディシアスにおける

見世物の実態を再構成する余地は残されているのである。

以下、前節で指摘した問題点を踏まえ、アフロディシアスを中心として実際に史料を検討していくわけだが、まず次章において、史料が比較的豊富であり、既存の文化としてより長い伝統を持つ「ギリシア風競技」の状況を考察する。それを踏まえ、続く第三章で、「ギリシア風競技」におけるローマの要素、およびローマの要素そのものである剣闘士競技の意義について分析する。以上の考察を勘案し、最終的に小アジアにおけるギリシア都市にとって、見世物はいかなる意義を有していたのか、さらには彼らにとってローマとはいかなる存在であったのかを解明することが本稿の最終目標となる。

- ① W. Burkert, "Die antike Stadt als Festgemeinschaft", in P. Hugger *et al.* (Ed.), *Stadt und Fest: zu Geschichte und Gegenwart europäischer Festsultur*, Stuttgart, 1987, S. 25-44.
- ② K. Welch, "The Stadium at Aphrodisias", *AJA* 102 (1998), p. 558. また本書の祝祭の様子は拙著『古代ギリシアの歴史』12-2-5を参照。
- ③ Mitchell [1993a], p. 217f.
- ④ ローマ期のオリムピオン祭については、井上秀太郎「残照のオリンピア——ローマ時代——」桜井真理子、橋場弦編『古代オリンピック』岩波書店、二〇〇四年、一八〇—一九七頁が簡潔にまとめているので、ここでは参照を省いた。
- ⑤ Plin. *Ep.* 10 118. Cf. Mitchell [1993a], p. 218.
- ⑥ Polyb. 30, 26, 1-3.
- ⑦ Plut. *Luc.* 23, 1.
- ⑧ L. Robert, *Les gladiateurs dans l'Orient grec*, Paris, 1940, pp. 264-266.
- ⑨ ネムニクと神々の風遊び M. B. Hornum, *Nemesis, the Roman State, and the Games*, Leiden, 1993: S. Pastor, "Il culto della Nemesis nelle province balcanico-danubiane", in I. Beggioni (a cura di), *Storia delle religioni e archeologia*, Roma, 2008, pp. 211-236 を参照。
- ⑩ A. H. M. Jones, *The Greek City from Alexander to Justinian*, Oxford, 1940, pp. 227-235.
- ⑪ L. Moretti, *Iscrizioni agonistiche greche*, Roma, 1953 (Biblioteca di Scienze e Lettere, 1462).
- ⑫ SEG 38, 1462.
- ⑬ M. Worle, *Staat und Fest im kaiserzeitlichen Kleinasien: Studien zu einer agonistischen Stiftung aus Oinoanda*, München, 1988, S. 227-258.
- ⑭ S. Mitchell, "Festivals, Games, and Civic Life in Roman Asia Minor", *JRS* 80 (1990), pp. 189-193. Cf. Id. [1993a], pp. 217-225.
- ⑮ O. M. van Nijf, "Athletics, Festivals and Greek Identity in the Roman East", *PCPS* 45 (1999), p. 197. Cf. Id. "Local Heroes: Athletics, Festivals and Elite Self-Fashioning in the Roman East", in S. Goldhill (ed.), *Being Greek under Rome: Cultural Identity, the Second Sophistic and the Development of Empire*, Cambridge, 2001, pp. 306-334.
- ⑯ Z. Newby, *Greek Athletics in the Roman World: Victory and*

Virtue, Oxford, 2005, pp. 276-281; J. P. König, *Athletics and Literature in the Roman Empire*, Cambridge, 2005, pp. 213-216; 345-352.

⑭ van Nifl [1999], pp. 186-188; König [2005], p. 213f.

⑮ Robert [1940], p. 241. トーマス・マンは「さむい冬に、ローマの皇帝は、キリシム世界の存続を危ぶみ、キリシム世界に於ける剣闘士競技の衰えを嘆く」。 Cf. L. Friedländer, *Roman Life and Manners under the Early Empire*, vol. 2, trans. by J. H. Freese and L. A. Magnus, New York, 1979, p. 84f.

⑯ M. J. Carter, *The Presentation of Gladiatorial Spectacles in the Greek East: Roman Culture and Greek Identity*, unpublished Ph. D. thesis, McMaster, 1999, pp. 293-297. Cf. Id., "Gladiators and Monomachoi: Greek Attitudes to a Roman Cultural Performance", in Z. Papakonstantinou (ed.), *Sport in the Cultures of the Ancient World: New Perspectives*, London and New York, 2009, pp. 150-174.

⑰ Ch. Mann, "Gladiators in the Greek East: A Case Study in Romanization", *International Journal of the History of Sport* 26 (2009), p. 276ff; Id., "Um keinen Kranz, um das Leben kämpfen wir!" *Gladiatoren im Osten des Römischen Reiches und die Frage der Romanisierung*, Berlin, 2011, S. 177-181. 彼は「ギリシム人、ローマ人の両方からギリシム人の英雄を徳を承継しつづける者」として、剣闘士競技に於ける特徴を論じている。また「我が國に於ける半、剣闘士競技に關する研究が隆盛を遂げたのは、梶田知彦『剣闘士競技 (munera gladiatoria) 研究百年史——政治・文化史から社会・性格史へ——』、『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第四分冊』五二(二〇〇七年)、『二〇一二年 眞は剣闘士競技に關する研究動向を把握する上で重要である。ギリシム

に世界に關しては、開催場所の問題に限られるが、本村凌二「帝國を魅せる剣闘士——血と汗のローマ社会史」山川出版社、二〇一一年、一四一—一四五頁がある。帝國西方に關しては、佐野光宣「剣闘士競技とローマ社会——ポンペイの事例から」『人文知の新たな総合に向ひつ』二二世紀COEプロジェクト「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第五回報告書(下巻)、京都大学大学院文学研究科、二〇〇七年、一—三〇頁；同「帝政前期ローマにおける剣闘士競技の社会的機能——カリア・ナルネネシスの都市ネポウスの事例から」『西洋史学』三三〇(二〇〇八年)、九〇—一一頁；同「帝政前期コス・パニオにおける剣闘士競技——夙州ハエニキカを中心」と『西洋古典学研究』五八(二〇一〇年)、三七—四八頁を参照する。

⑱ König [2005], p. 215f.

⑳ 梶田知彦「I Apameia Tō "ayōv" 以外に、剣技場 *stadion* 「競技の賞金 *ἀδολοί*」「軍服を脱ぎ *ἐκέντρος*」とした「ギリシム風競技」に關する用語の備用がみられた。この点については、Mann [2011], S. 156-163 を参照する。

㉑ LSJ, s. v. "ayōv".

㉒ トロンハイニムスの史書に關しては、マントキヤード J. Reynolds, Ch. Roueché and G. Bodard (eds.), *Inscriptions of Aphrodisias*, 2007 (<http://insph.kcl.ac.uk/iaiph2007>) を参照。(後述脚註二〇一五年一月二二日)。「*ayōv*」は *IAPH2007* の語品。

㉓ C. Ratté, "New Research on the Urban Development of Aphrodisias in Late Antiquity", in D. Parrish (ed.), *Urbanism in Western Asia Minor: New Studies on Aphrodisias, Ephesos, Hierapolis, Pergamon, Perge, and Xanthos*, Portsmouth, 2001, p. 119. 例えは *IAPH2007*, L. 107 には「アプロハイニムスの祭司」と思われる人物の存在が確認された。

②④ IAPH2007, 8, 3.

②⑤ IAPH2007, 8, 27.

②⑥ 帝政期における都市化の進展にうづは C. Ratté, "The Urban Development of Aphrodisias in the Late Hellenistic and Early Imperial Periods", in Ch. Berns et al. (Hg.), *Patris und Imperium: kulturelle und politische Identität in den Städten der römischen Provinzen Kleasiens in der frühen Kaiserzeit*, Leuven, 2002, pp.

5-32 を参照。

②⑦ Ch. Roueché, "Rome, Asia and Aphrodisias in the Third Century", *JRS* 71 (1981), pp. 103-120.

②⑧ J. Reynolds, *Aphrodisias and Rome: Documents from the Excavation of the Theatre at Aphrodisias*, London, 1982, pp. 33-37.

②⑨ Ch. Roueché, *Performers and Patrons at Aphrodisias: In the Roman and Later Roman Periods*, London, 1993.

## 第二章 アフロディシアスの見世物に表顕する都市間関係——「ギリシア風競技」を中心に——

### 第一節 見世物に集う他共同体の人々

見世物に共通する要素として、共同体内外の人々によって一定の集団が形成される点をすでに指摘したが、そもそもアフロディシアスにおける見世物にはどのような人々が集っていたのだろうか。かかる疑問を出発点としたい。この点に迫るのに有効な史料が劇場や競技場の座席に刻まれた座席銘である。この座席銘の多くは、「誰その場所」というように席の確保を示すものであるが、落書きの類も数多く存在し、その刻字が公的か否かの判別は困難である。それゆえ、刻字の年代決定も不確実であり、アフロディシアスの場合であると、二世紀から六世紀とかなり幅があるため、扱いは慎重になる必要がある。しかしながら、一定の集団を形成するものとして見世物を捉えるという本稿の姿勢と照らし合わせる①と、まさにこの史料は人々の集いの証として決して無視できないものである。

加えて、多くの座席銘からは、見世物の内容が反映されているものを見出すことはできない。すなわち、「ギリシア風競技」と「ローマ風競技」のいずれかで機能していたかという情報は、多くの座席銘には含まれていないのである。実際、多くの小アジア都市同様、アフロディシアスにおいて両競技は既存の劇場や競技場という同一の場で実施されていた。し

たがって、座席銘が両競技の区分に影響を受けていたのか否かを判断することはできない。さしあたり、座席銘の検討に際して、見世物の内容については留保する。

アフロディシアスにおける座席銘は全部で一〇二点確認される。刻字内容の内訳としては、不明を除いて最も多いのが「個人名」の三五点である。D・B・スモールによると、ローマ期に個人のための座席が登場するようになったのは、個人の社会的流動性が高まり、ローマ期以前の伝統的な平等主義からの逸脱という社会構造の変化に起因する。③しかしながら、二世紀から六世紀という時代幅と古代における死亡率の高さを考慮すると、同一人物、ひいては同一家系による長期的利用の可能性は低いとみてよいだろう。

帝政後期に属すると考えられる「党派」に関するものを除いて、次に一定数の座席銘が確認されるカテゴリーは、「職業」と「共同体」に関するものである。前者が八点、後者が五点それぞれ確認される。④職業名を記した座席銘については、O・M・V・ナイフの研究がある。彼によると、観衆の役割が重要である祝祭としての見世物において、観客席に場所を持つことは特権であり、したがって、観客席における座席配置は共同体構成員が、都市における自分たちの場所を主張するのに貢献した。⑤加えて、かかる性質ゆえに、エフェソスの劇場における銀細工師の暴動のように騒乱とも結びつき、見世物の空間は緊張関係を伴うものであったことも強調されている。⑥

共同体を示唆する座席銘の中には、アフロディシアス内の部族名に加え、他都市の人々に関するものも含まれる。この種の座席銘に関してCh・ルーシエは、ローマ市における類例に基づいて、他都市の代表者に取っておかれた席であったと指摘している。⑦この種の座席銘は、職業名に比べ、他都市での類例が圧倒的に少ないという難はあるが、⑧見世物が開催都市の人々のみならず、他共同体の人々を取り込むかたちで開催されていたことを実証するものとして注目に値する。

では、実際いかなる都市の人々がアフロディシアスにやって来ていたのだろうか。座席銘から確認されるのは、マスタウラ、アンティオケイア、キピュラ、史料の読み次第ではミレトスも確認できるが、文字の判別が困難であるため确实

なことはいえない<sup>⑨</sup>。先行研究に従い、アンティオケイアをマイアンドロス川付近の都市とみなすなら、不確実なミレトスを除く三市は比較的アフロディシアスの近隣に位置していることがわかる（地図参照）。アンティオケイア、およびマスタウラはアフロディシアスの北西約五〇キロ、そしてキビュラは南東約一〇〇キロの地点に位置している。これら三市の人々の存在を示す座席銘は、キビュラの一例を除いて、ある座席列全体にわたって刻字されている。つまり、少なくともアンティオケイア、マスタウラの人々はある程度の集団をなしてアフロディシアスにやって来ており、同一の場所に座つて見世物を観ていたと考えられる。

座席銘以外にもアフロディシアスの見世物に集う他都市の人々の存在を推測することができる。座席銘とは異なり、「ギリシア風競技」に限定されてはしまいが、次のような史料が存在する。

「アフロディシアスの人々のいとすばらしき都市の民会が、ヒエラポリスの民会を（称えた）。彼らは、神聖な競技という贈物を与えるための犠牲式をともに行つた。（以下略）<sup>⑩</sup>」

これは三世紀半ば、「ギリシア風競技」と考えられる神聖な競技のための共同犠牲式にヒエラポリスの人々が参加したことを称える碑文である。ヒエラポリス以外にも、ケレタパ、サルバケのアポツロニア、同じくサルバケのヘラクレイア、そしてタバエについて同様の碑文が確認される。「神聖な競技という贈物を与え」、そして「犠牲式をともに行つ」ていることから、これらの都市の人々がアフロディシアスを訪れ、競技に参加していたと思われる。これら五市の位置関係をみると、いずれもやはりアフロディシアスの近隣、すなわち約五〇キロ圏内に集中している（地図参照）。これら以外の都市の人々が存在しなかったと断言することはできないが、少なくとも、アフロディシアスにおける見世物には、同市の人々のみならず、近隣他都市の人々も一定数参加していたことが認められるのである。

## 第二節 他都市の競技祭を列挙する顕彰碑文の検討

では、アフロデイシアスの人々がどこか他の都市の見世物を訪れることはあったのだろうか。前節において検討したように、他都市における座席銘においてアフロデイシアスの人々の存在は確認されないもので、観客としての同市民の動向は不明である。しかしながら、同市の競技者の動向についてはある程度把握することができる。というのも、同市における「ギリシア風競技」の競技者に関する碑文の中には、他都市との関係を示唆するものが存在するからである。それが、他都市における「ギリシア風競技」に参加し、そこで勝利を収めた競技者に対する顕彰碑文である。オリュンピア祭などは古典期の時点ですでに「国際的」なものであったが、ローマ期に起こった「競技祭の爆発」にともない、参加可能な競技祭の絶対数が増大した結果、二世紀から三世紀にかけて、各地で同様の碑文が建立されるようになった。

これらの史料は以降の議論において重要となるので、以下にその一例を訳出しよう。

「評議会、民会、長老会、そして若者組が」、マルコス・アウレリオス・「……」オスを「称えた」。いともすばらしき彼はアルテミドロスの息子のアガトプスの息子のティモクレスの息子で、アフロデイシアス、ニコメディア、アンキュラの（市民）、評議員、長距離走者、神聖な勝者、ピュティア祭の勝者、アクティア祭の勝者、他の競技祭でも彼は勝利し、それらを以下に記す。ガラティアのアンキュラにおけるアスケレベア祭の「……」少年長距離走、ピテュニアのハドリアネアにおける、神聖なハドリアネア・アンティオネア祭の少年長距離走、ポントウスのヘラクレイアにおける、アクティア祭に等しい、ハドリアネア・ヘラクレイア祭の少年長距離走、カルケドンにおける少年長距離走、続いて、成年長距離走、ニコメディアにおけるアウグステイア・セウエレイア祭の成年長距離走、同日の往復走、武装競走、ニカイアにおけるアウグステイア祭の成年長距離走、ポントウスのヘラクレイアにおける、アクティア祭に等しい、ハドリアネア・ヘラクレイア祭の成年長距離走、同日の武装競走、ニカイアにお

表 碑文における競技祭への言及

表一：アフロディシアス

属州名・地域名	数	割合
イタリア以西	0	0.0%
イタリア半島	1	1.5%
アカイア	2	3.0%
マケドニア	1	1.5%
トラキア	0	0.0%
エーゲ海島嶼	0	0.0%
キュプロス	0	0.0%
クレタ・キュレナイカ	0	0.0%
アジア	20	30.3%
ビテュニア・ポントゥス	10	15.2%
リュキア・パンフュリア	0	0.0%
ガラティア	3	4.5%
カッパドキア	2	3.0%
キリキア	3	4.5%
アエギプトス	1	1.5%
シュリア	12	18.2%
アラビア	2	3.0%
不明	9	13.6%
総数	66	100.0%

表二：属州アジア

属州名・地域名	数	割合
イタリア以西	1	0.4%
イタリア半島	18	7.0%
アカイア	80	31.1%
マケドニア	11	4.3%
トラキア	0	0.0%
エーゲ海島嶼	0	0.0%
キュプロス	0	0.0%
クレタ・キュレナイカ	1	0.4%
アジア	104	40.5%
ビテュニア・ポントゥス	3	1.2%
リュキア・パンフュリア	1	0.4%
ガラティア	1	0.4%
カッパドキア	3	1.2%
キリキア	4	1.6%
アエギプトス	4	1.6%
シュリア	4	1.6%
アラビア	0	0.0%
不明	22	8.6%
総数	257	100.0%

表三：属州アカイア

属州名・地域名	数	割合
イタリア以西	0	0.0%
イタリア半島	11	9.4%
アカイア	46	39.3%
マケドニア	4	3.4%
トラキア	3	2.6%
エーゲ海島嶼	0	0.0%
キュプロス	0	0.0%
クレタ・キュレナイカ	0	0.0%
アジア	32	27.4%
ビテュニア・ポントゥス	4	3.4%
リュキア・パンフュリア	2	1.7%
ガラティア	2	1.7%
カッパドキア	0	0.0%
キリキア	3	2.6%
アエギプトス	0	0.0%
シュリア	8	6.8%
アラビア	0	0.0%
不明	2	1.7%
総数	117	100.0%

※ 属州名については、原則原語表記としたが、属州ではない地域、あるいはどの属州に含まれるか不明のものについては現代語表記とした。

※※ 属州アジア：イアソス、エフェソス、コス、サルデイス、スミュルナ、ディデュマ、トラッレス、ハリカルナッソス、フィラデルフィア、ベルガモン、マグネシア（シピュロス、マイアンドロス）、ミレトス、ラオディケイア

※※※ 属州アカイア：アテナイ、エピダウロス、デルフォイ、メガラ

けるアウグステイア祭の成年長距離走、同日の往復走、武装競走、フィラデルフィアにおける、シア・コイノンの祝祭の成年長距離走。（以下略）<sup>⑩</sup>

訳出した史料の冒頭には、復元ではあるが「評議会、民会、長老会、そして若者組」による決議であることが明示された上で、被顕彰者であるマルコス・アウレリオス・「・・・」オスなる人物の略歴が記され、残りには彼が参加し、勝利を収めた競技祭名が列挙されている。被顕彰者はアフロディシアス以外に、ニコメディア、アンキユラの市民権を保持しているが、その中でアフロディシアスが先頭に記されていること、そし



てこの碑文そのものがアフロディシアスに建立されていることから、彼はアフロディシアスを中心に活動していた人物と考えてよいだろう。同市における類似史料は、訳出したもの以外に五点確認される。<sup>⑭</sup>この五点には、訳出した史料のように競技者の市民権は明示されておらず、彼らがアフロディシアス市民であるかどうかを判断することはできない。なお、これらの史料はすべて二世紀から三世紀に属する。

さて、訳出したものを含めた計六本の碑文には、いかなる競技祭が刻まれているのだろうか。以下でその地理的分布を整理しよう。アフロディシアスにおける関連史料で言及されている競技祭を地域ごとに分類したのが表一である。範囲としては、西はイタリア半島から東はアラビアやシュリア地方と幅広いが、同市が属する属州アジアの競技祭への言及が六六例中二〇例（三三〇％）と最も多く、際立っている。果たしてこれは、アフロディシアス特有の傾向なのであろうか。

それを確認するために、アフロディシアスが属する属州アジア、および属州アカイアで出土している、複数の競技祭での勝利を伝える碑文から抽出したデータと比較を行う（表二、表三）。<sup>⑮</sup>属州アカイアのデータを提示するのは、アジアに次いで史料状況が良い上に、アジア同様、多くの競技祭が開催されていた地域であるため、アフロディシアスのデータをより広範なギリシア世界の文脈に位置づけることが可能となるからである。属州全体のデータを算出するにあたって、各都市の競技者が勝利したとされる競技祭を一としてカウントしている。同じ都市に複数の競技者が存在し、同一競技祭が言及されている場合、全体のデータに影響を及ぼすものではないと判断し、重複した分を区別してはいない。検討した史料の年代はアフロディシアス同様、二世紀から三世紀に集中しているが、史料の数に関して、アジアとアカイアとは前者が二四点、後者が五点とかなりの偏向がある点は断っておきたい。なお、属州アジアの中にはアフロディシアスを含めていない。同市の特徴による相殺を避けるためである。それでは、表二、表三をそれぞれみてみよう。属州アジアに関する表二において、最も大きな割合を示しているのは、自属州であるアジアの競技祭である。次に多いのがアカイアであり、これら二地域で全体のおよそ七〇％を占めている。属州アカイアの表三では、自属州であるアカイアが最多であり、アシ

アがそれに続く。表三においても、アカイアとアジアだけで全体の七〇%近くを占めている。二つの表に共通して、自属州の競技祭への言及が多数を占めるのは、単に近いという地理的要因が大きく影響していると考えられるが、そうした移動の利便性という制約を超えて、アジアではアカイア、アカイアではアジアが一定数を占めていることは注目に値する。この結果は、碑文の残存状況に依るとも考えられるが、いずれにせよ、アジア、アカイアそれぞれの属州の都市は、自属州のみならず、互いの属州における競技祭にも意識を向けていたことは確かであろう。

では、この結果と表一を比較するとどうであろうか。自属州の競技祭への言及が最多である点は、表二、表三の傾向と一致する。しかしながら、アフロディシアスでは、シュリア、ピテュニア・ポントウスが次に多く、アカイアは全体のわずか三%にすぎない。この傾向も、史料状況に由来する可能性はあるが、現存の史料に基づく限り、アカイアの少なさは無視できない。シュリアへの言及が多い理由を現存史料から実証することは困難であるが、シュリア以外のデータからは、アフロディシアスが、自らが属するアジア、およびそこに隣接するピテュニア・ポントウスという比較的近隣の地域での競技祭に敢えて言及していたことがうかがえる。

### 第三節 「ギリシア風競技」と都市間競争

以上を踏まえて、前節冒頭において訳出したような競技者への顕彰碑文における競技祭の列挙は何を意味するのだろうか。一例を除く計五点のアフロディシアスにおける史料に関しては、復元ではあるが、少なくとも競技者への顕彰が、評議会、および民会によって決定されていることがわかる。<sup>⑦</sup>ローマ期のギリシア都市における民会が果たした機能については、近年、議論が盛んである。一般に形骸化していたと考えられてきたローマ期におけるギリシア都市の民会であるが、当該期においても十分に機能しており、都市の問題解決において重要な役割を担っていたことが指摘されている。<sup>⑧</sup>例えば、エフェソス市民であるウエディオス・アントニノスの恵与行為をめぐるアントニヌス・ピウス帝からの手紙を記した碑文

には、建築物を都市に提供しようとするウエディオスと見世物を所望する民会との対立を見て取ることができる。その他、オイノアングのデモステネスに関する碑文では、競技祭創設をめぐって、彼と民会との間で年単位の交渉が行われていたことが示唆されている。<sup>②③</sup>

アフロディシアスの民会がどの程度機能していたか、その実態については別途検討が必要だが、いずれにせよ、評議会、および民会による決定事項は、都市の意向が反映されたものとして理解することができる。したがって、競技者に対する顕彰の主体は都市ということになるだろう。近年、小アジア北西部のアレクサンドリア・トロアスで発見された、ハドリアヌス帝の手紙を刻んだ碑文には、勝利を収めた競技者には、観衆が見守る中ですぐさま報奨が授与されるべきこと、そしてその報奨は穀物やブドウ酒ではなく、金銭であるべきことを不特定多数の都市に対して勧告する箇所が見出される。<sup>②④</sup>ここからも、競技者に対する報奨、およびそれに付随すると考えられる名誉は、観衆による視認を経た上で、最終的に都市によって保障されていたことがうかがえる。

列挙されている競技祭において、被顕彰者が勝利を収めたことは間違いないであろう。しかしながら、碑文に都市の意向がある程度反映されていることを考慮するならば、むしろ、碑文に列挙されている競技祭は、少なくとも都市側によって記すに値すると判断されたものとして理解されるべきではなからうか。

第一章第二節で若干触れたように、元首政期の小アジアでは都市間競争が苛烈を極めていたことが知られる。小アジアの諸都市は様々な手段によって、領土、都市の称号、そしてローマから与えられる諸特権の獲得をめぐって競っていた。<sup>②⑤</sup>実際、この都市間競争は皇帝を巻き込むほど重大な社会現象であった。エフェソスに宛てられたアントニヌス・ピウス帝の手紙からは、都市の称号をめぐるエフェソスとペルガモンの競争に対して、皇帝に意見が求められていたことが読み取れる。<sup>②⑥</sup>属州アジア、およびビテュニア・ポントウス西部を中心に、当地域における領土、および都市の称号をめぐる争いを分析したA・エレルは、かかる状況をヘレニズム期より継続する特質として位置づけ、都市間関係を規定するものと

しての重要性を強調している。<sup>②④</sup>

アフロデイスiasも小アジアにおける都市間競争に関与していたことが史料的に推察される。例えば、第一章第三節ですでに言及した「アーカイヴ壁」には、共和政末以来のローマとの関係を示す文書、特に皇帝からの手紙が数多く刻まれている。しかしながら、この碑文群を文字通り「アーカイヴ」として理解することは危険である。A・カニオティスによると、この壁に刻まれた文書はアフロデイスiasが意図的に選択したものである。というのも、この壁の文書の中には同市とローマの直接的関係を示すもののみならず、エフェソスやスミュルナといった他都市に宛てられた、アフロデイスiasの特権を示唆する皇帝の手紙も含まれているのである。<sup>②⑤</sup> それゆえここには、以上のような他都市に比して自らの都市をよく見せようとする競争意識がはたっていたと想定することができ、アフロデイスiasも都市間競争という地域的文脈に属していたと十分に考えられるのである。<sup>②⑥</sup>

したがって、競技祭の列挙に関して、都市側が記すに値すると判断したものであること、アフロデイスiasも加わった都市間競争という地域的文脈、そして前節で確認したように、アフロデイスiasでは属州アジア、ピテュニア・ポントゥスに代表される小アジアの競技祭へ主に意識が向けられていたことを考えあわせると、同市における複数の競技祭を列挙した顕彰碑文は、少なくとも「ギリシア風競技」の競技者に関して、都市の人的資源の豊かさを他都市に示すことを意図して建立されたと考えられる。優れた競技者という人的資源は都市に名誉をもたらしうる存在であった。現に、アフロデイスias出土の、競技者への顕彰碑文においては、列挙されている競技祭名の中に、「アフロデイスiasの第一人者 *ἄριστος ἀποδείκται*」という語が何度も挿入されている。<sup>②⑦</sup> この被顕彰者が同市の市民権を有する者であるかは碑文の文面から判断することはできないが、少なくとも、彼がアフロデイスiasと深い関係にあることがここで強調されている。その他、競技祭の勝者に対して、評議会への加入を認める顕彰碑文も同市において発見されている。<sup>②⑧</sup> すなわち、顕彰された競技者が評議員として、都市の有力者集団に取り込まれていたのである。確かに、競技者自身に対する名誉の付与とい

う側面は存在したが、<sup>②</sup>それと同時に彼らの名誉は都市の名誉に読み替えられていたのである。

本章第一節でも確認したように、アフロディシアスで開催された何らかの見世物には、複数の近隣他都市の人々が少くとも観客として参加していた。加えて、一例のみではあるが、アテナイ出土の、「ギリシア風競技」の競技者に対する顕彰碑文に、アフロディシアスの競技祭が列挙されていることから、<sup>③</sup>競技者レヴェルでも他都市の人々がある程度アフロディシアスを訪れていたと考えてよいだろう。したがって、少なくとも以上のような人々に対して、アフロディシアスは、競技祭を列挙した顕彰碑文をもって、競技者に付随する都市の名声をアピールしようとしていたのである。

共同体内外の人々が集うという見世物の性質を考慮するならば、優れた競技者という人的資源の誇示が結果的に都市の名声に結びつくという点で、彼らへの顕彰碑文を建立すること、とりわけその中で彼らが勝利した他都市での競技祭を列挙することは重要だったのである。かかる検討結果から、少なくともアフロディシアスにおける「ギリシア風競技」は、都市間競争の一手段として機能していたと理解することができるのである。

- ① 座席銘の重要性について、M. Maas, *Die Prohedrie des Dionysosfesters in Athen*, München, 1972, S. 94; Ch. Roueche, "Les spectacles dans la cité romaine et post romaine", *CCG* 3 (1992), p. 159.
- ② *IAPH*2007. 2. 6; 8. 18; 8. 53-62; 64; 69-71; 78-79; 81; 10. 2-4; 6; 9-11; 13; 21; 24; 26-36; 40.
- ③ D. B. Small, "Social Correlations to the Greek Cavea in the Roman Period", in S. Macerady and F. H. Thompson (eds.), *Roman Architecture in the Greek World*, London, 1987, p. 86.
- ④ 「饗宴」: *IAPH*2007. 8. 61 (Row 8); (Row 13); 10. 3 (Row X); 10. 9 (Row Y); 10. 11 (Row D); 10. 21 (Row W); 10. 29 (Row Z); 10. 33 (Row N). 「栞画巻」: *IAPH*2007. 10. 4 (Row O); 10. 11 (Row H); 10. 27 (Row Y); 10. 29 (Row S); 10. 30 (Row E).
- ⑤ O. M. van Nijf, *The Civic World of Professional Associations in the Roman East*, Amsterdam, 1997, p. 239f.
- ⑥ van Nijf [1997], pp. 234-239. ヘルヘンヌスの劇場における銀細工師の座席銘について、Acts 19, 23-41 を参照のこと。
- ⑦ Roueche [1993], p. 121.
- ⑧ 現在確認可能なギリシア風競技祭の彫像は、*Keramos* 17 のみである。
- ⑨ 「ヘラクレス」は陶器製の「ヘラクレス」(入浴)の場所とヘラクレスの可能性を残された。
- ⑩ Roueche [1993], p. 96.
- ⑪ *IAPH*2007. 12. 925.

- ⑫ *IAPH2007*. 12. 924: 926-929. 同様の碑文で、地名が不明なものとして *IAPH2007*. 12. 930 を参照。
- ⑬ *IAPH2007*. 12. 215.
- ⑭ *IAPH2007*. 1. 182: 12. 214: 711: 716: 920.
- ⑮ 参照した史料は次の通りである。風土マント: *IAG* 56: 58-62: 67-71: 74-75: 77-78: 82: 84: *I. Ephesos* 1130-1132: 1605: 1611: 1613: 1615: *I. Smyrna* 662: *I. Tydlais* 118. 風土マカント: *IAG* 53: 81: 87-88: 90.
- ⑯ 一部の碑文の年代は三世紀のものもあり、このうちマケドニア、ヘラガバルス帝やセウヘルス・アレクサンデル帝のちうにシムリア出身の皇帝が出ている。それゆえ、この地方出身の皇帝を意識して、アフロデイシアスの競技者はシムリア地方も活動の範囲に入れてきたと考えられる。実際、アフロデイシアスはセウヘルス・アレクサンデル帝と文書のやり取りを行っていたことが確認される (*IAPH2007*. 8. 99)。しかしながら、かかる点を確認するには史料は乏しく、推測の域を出ない。
- ⑰ *IAPH2007*. 12. 202 は、競技者への言及がなく、競技者への顕彰碑文であるが、ここには復元し依らず、完全なかたちで評論会、および民会が顕彰の主体として関わっていたことが記されている。
- ⑱ 近年の研究動向については C. Briaz, "La vie démocratique dans les cités grecques à l'époque impériale romaine : notes de lectures et orientations de la recherche", *Topoi* 18-2 (2013), pp. 367-399 を参照されたい。民会の機能を評論会との根拠の二つとして注目されているのが Dio Chrys. Or. 8. 24-26 である。内容はマカント・クリュノストモスによる創作であるが、活気ある民会の様子が描写されており、当時の現実を少なからず反映しているものとして再評価される。
- ⑲ *I. Ephesos* 1491.
- ⑳ G. M. Rogers, "Demosthenes of Oenoanda and Model of Energetism", *JRS* 81 (1991), pp. 93-96.
- ㉑ *SEG* 56. 1359. II. 24-28. この碑文は風土マカントの碑文と同じく、C. P. Jones, "Three New Letters of the Emperor Hadrian", *ZPE* 161 (2007), pp. 145-156 を参照。
- ㉒ マカントは競技者間の競争を促すことで、Magie [1950], pp. 635-639: Sartre [1995], pp. 261-270: B. Burrell, *Neokoroi: Greek Cities and Roman Emperors*, Leiden, 2004, pp. 351-354 を参照(シムリア)。
- ㉓ *I. Ephesos* 1489.
- ㉔ A. Heller, « Les bêtises des Grecs »: *conflits et rivalités entre cités d'Asie et de Bithynie à l'époque romaine* (129 a. C. - 235 p. C.), Bordeaux, 2006.
- ㉕ 碑文 *IAPH2007* 8. 31: 32: 33 を参照(シムリア)。
- ㉖ A. Chaniotis, "The Perception of Imperial Power in Aphrodisias: The Epigraphic Evidence", in L. de Blois, P. Erdkamp, O. Hekster et al. (eds.), *The Representation and Perception of Roman Imperial Power: Proceedings of the Third Workshop of the International Network Impact of Empire (Roman Empire, c. 200 B. C. -A. D. 476)*, Amsterdam, 2003, pp. 250-260.
- ㉗ *IAPH2007*. 12. 920. b.
- ㉘ *IAPH2007*. 1. 182.
- ㉙ Dio Chrys. Or. 31. 21.
- ㉚ *IAG* 90.

### 第三章 アフロディシアスの見世物におけるローマの要素

#### 第一節 「ギリシア風競技」とローマ中央

たとえ「ギリシア風競技」が都市間競争の手段としての重要性を有するとしても、「はじめに」でも述べたように、それは小アジアという地域内部でのみ展開されていたのではなかった。「ギリシア風競技」に対する、皇帝やローマ市当局といったローマ中央の関与に加え、見世物そのものに関しても、剣闘士競技に代表される「ローマ風競技」が「ギリシア風競技」に並行して開催されていたのである。最終的に、見世物としての両競技の關係性を明らかにすることを目標に、本節ではまず「ギリシア風競技」にみられるローマ中央との關係を示唆する要素を整理していきたい。

第一に、前章第二節で扱った、他都市の競技祭を列挙するアフロディシアスの競技者に対する顕彰碑文で、ローマ市におけるカピトリア・オリュンピア祭が挙げられている点が指摘できる。<sup>①</sup> アフロディシアス以外では、一三の小アジア都市における史料が同じくローマ市における競技祭に言及している。このカピトリア・オリュンピア祭は、ドミティアヌス帝によって後九六年に初めてローマ市において設立されたものである。<sup>②</sup> ギリシア的な運動競技そのものは、ローマ市においてさほど人氣を博さなかつたらしいが、<sup>③</sup> ギリシア人競技者にとつての活動範囲にローマ市も組み込まれていたことをこれは示している。

ローマ市における競技祭に加えて、「アウグステイア祭」「ハドリアネイア祭」などのように、皇帝の名を冠する競技祭が列挙されている点も注目に値する。多くのギリシア都市は、二世紀から三世紀にかけて、皇帝の許可のもとに競技祭を創設し、それによって競技祭の権威づけを行っていたとされる。<sup>④</sup> オイノアンダのデモステネスによる競技祭創設も、その名称に皇帝の名は付属していないものの、ハドリアヌス帝の認可によってその創設が許可されていることがわかる。<sup>⑤</sup> 事実、アフロディシアスにも「大ゴルディアネイア・アッタレア祭」という競技祭が確認される。<sup>⑥</sup> これはおそらく皇帝ゴルディ

アヌス三世との関係を示唆するものであるが、現実にとどのようなやり取りが行われていたかは不明である。これら競技祭創設に伴う皇帝の許可は必ずしも要しなかったことは、アフロディシヤス出土の碑文から明らかであるが、「ギリシア風競技」の中でもより格の高い「神聖な冠付競技」を創設する際、多くの場合、皇帝の許可を要していた<sup>④</sup>。

この他、より直接的なローマ中央との関わりは、運動競技組合、および皇帝自身による競技者への顕彰である。以下にその一例を訳出しよう。

「神聖な運動競技者の敬虔なアウグストゥス巡回組合、「ヘラクレス」を奉ずる全国運動競技組合、そしてインペラトル・カエサル・トラヤヌス・ハドリヤヌス・アウグストゥスによって、次のような決議がなされた。この布告が、いとも神聖なアフロディシヤスの評議会と民会に送られるべきこと。ディオゲネスの息子、カッリクラテス、アフロディシヤス出身、パンクラティオン競技者、神聖な勝者、「多くの」(競技での)勝者は、いとも若きころより徳の道へと向かった。彼が汗と労苦によって、立派な評判を得て、そしてその辛勞によって得た完全な知恵のために、世界のすべての人から「尊敬を？」集めた。(中略)アジアの大都市エフェソスにおいて、カッリクラテスにふさわしい碑文つきの顕彰像をもってなしたように、この布告を通して、その避けられない運命に伴う魂への負担という点で、優美なる名譽の贈り物が、私たちの仲間の競技者を慰めるために。」<sup>⑤</sup>

例えば、右の史料の冒頭において、二つの運動競技組合と皇帝とが連名で決議をなしたことが記されており、それ以下にアフロディシヤス出身の競技者への顕彰の言葉が並べられている。これら「神聖な運動競技者の敬虔なアウグストゥス巡回組合」「ヘラクレス」を奉ずる全国運動競技組合」の他にも、アフロディシヤスからは「ヘラクレスを奉ずる神聖な巡回運動競技組合」「ディオニュソスを奉ずる神聖な全国組合」といった組合も確認されている。<sup>⑥</sup> 組合の名称については、他の都市から確認されるものをみても実に多様であり、それだけにこの組合の性質についての理解はいっそう困難なもの



となつてゐる。<sup>⑫</sup>

ローマの東方進出以前から、「ディオニユス芸人団」といった組合がすでにギリシア世界に存在していたが、かかる組合とローマ中央との関係が本格化するのには紀元一世紀半ばのクラウディウス帝期であつた。<sup>⑬</sup> ハドリアヌス帝期、あるいはアントニヌス・ピウス帝期になると、全国運動競技組合の本部がローマ市に新たに設置されたと考えられている。<sup>⑭</sup> A・アネツィリは、かかる組合が民会や評議会といった都市の組織と合同して競技者を顕彰していることから、いくつかのギリシア都市は常設の組合を抱えていたのではと推定している。<sup>⑮</sup> この推定が妥当であるならば、以上のような組合が都市とローマ中央を媒介する役割を担っていたと考えられる。実際、前章第三節で言及した、アレクサンドリア・トロアス出土の碑文に刻まれたハドリアヌス帝の手紙は、運動競技組合に宛てられており、その中で競技に関する規定や競技祭の周期についての提案がなされていることから、かかる組合が皇帝の意向を都市側に伝える役割を果たしていたことは十分に想定される。それゆえ、ローマ中央と都市を媒介するはたらきの一環として、組合は競技祭創設の許可、および競技者の顕彰を皇帝に求めていたのかもしれない。しかしながら、アネツィリ自身も認めるように、競技組合の活動内容に関する実態は依然不明瞭な部分が多い。<sup>⑯</sup> 組合活動の実態が解明されない限り、組合の本部がローマ市に設置されたことの意義などを明らかにすることは困難であるが、いずれにせよ、当時の「ギリシア風競技」はローマ市や皇帝を大いに巻き込むかたちで展開されていたのである。

さて、先行研究はこれらの点について、皇帝崇拜の一環であり、ローマ権力を前にしたギリシア人の反応として理解してきた。<sup>⑰</sup> 中には、これをローマに対する忠誠の証拠とみる研究者もいる。<sup>⑱</sup> 後述するように、皇帝崇拜がギリシア人の側からなされていることから、「ギリシア風競技」においてローマ中央との関係を構築することは、都市の安全保障などを目的に、ギリシア人たちがローマの支配を受容していたことを意味するのは確かであろう。<sup>⑲</sup> しかしながら、これは一面的な理解にすぎないのではなからうか。先にも述べた通り、アフロディシアスは二世紀から三世紀にかけて、共和政期末ま

でにさかのぼる、ローマ中央とのやり取りを改めて刻字した「アーカイヴ壁」を劇場に設置した。A・カニオティスに從うならば、ここに刻まれた文書はアフロディシアスの選択の結果であり、ローマ中央より付与された特権などを他都市にアピールするという点で、都市の競争意識が反映されたものとして理解することができる。すなわち、ローマ中央との特権的關係は、アフロディシアスにとって都市間競争に資するものだったのである。かかる見解に基づけば、「ギリシア風競技」におけるローマ中央との關係を示唆する要素についても同様のことがいえるのではなからうか。少なくとも、皇帝および運動競技組合による競技者の顕彰は、ローマ中央との特権的關係を直接的に示している。ローマ市における競技祭、そして皇帝の名を冠する競技祭への参加、あるいはそれらを碑文に刻むことがどれほどの特権であるかを言明することはできないが、ローマ中央との何らかの關係を示唆すること自体に一定の効果があつたとすれば、これらも他都市に対するアピールとなつたであらう。

「ギリシア風競技」そのものが都市間競争に寄与する側面を有していたことは前章で確認した通りである。その上、アフロディシアスに限れば、「ギリシア風競技」に関して、ローマ中央との義務的な關係は看取されない。すなわち、同競技におけるローマ中央との關係はすべてアフロディシアスによる選択の結果と考えられるのである。同競技が都市間競争の一手段であるとの見方は、すでにS・ミツチェルも指摘しているが、同競技におけるローマの要素は、支配者たるローマ、そしてそれに從属するギリシア人という帝国における権力關係の枠組みにおいて語られてきた。しかしながら、これまでの分析によると、アフロディシアスは選択的にローマ中央との關係を構築してきた。つまり、一見ローマの支配を受容し、外見上は帝国の支配構造に組み込まれながらも、その実、他の小アジア都市に対して自都市の優越を強調し、名譽の点で都市間競争を有利に展開することを主な目的として、ローマの權威を積極的に借りていたと考えられるのである。たとえ、支配者たるローマとの關係構築がギリシア都市にとって必要に迫られたものであつたとしても、その關係がギリシア都市によって自らの都合のよいように利用されるといふ側面が並行して存在していたのである。

## 第二節 皇帝崇拜と剣闘士競技

前節において触れたように、都市を主体としたローマ中央との関係構築に寄与したのが、皇帝崇拜であった。ギリシア都市とローマ中央、とりわけ皇帝との関係を考える上で重要なこの皇帝崇拜は、スエトニウスの作品中にもあるように、ローマ人が属州民に押しつけたわけではなく、ギリシア人たちが積極的に開始したものである。初代皇帝アウグストゥスは、自身が神として崇められることを忌避し、属州民に対して、女神ローマとの合祀という条件つきで崇拜を許可したほどである。かつて、S・プライスは、皇帝崇拜を政治的なものか、あるいは宗教的なものかという二項対立的に捉えるのではなく、両者の混合物であるとの見方を示し、支配者と被支配者の関係を規定するものとして位置づけた。彼の成果を継ぎ、最近では、藤井崇がキプロス島における皇帝崇拜を分析し、属州民と皇帝のコミュニケーションという新たな視点から皇帝崇拜を評価している。

特に小アジア都市は、皇帝のための神殿を建立し、皇帝から「神殿守 *νεκτορος*」という称号の獲得を競うほど皇帝崇拜が盛んな地域であった。ローマの歴史家タキトゥスもこうした状況を詳しく伝えている。彼によると、多くの小アジア都市がローマの元老院にて都市の故事来歴を披歴しあい、いかに自らの都市が皇帝の神殿を建立するにふさわしいかを訴えていた。実際、アフロディシアスではセバステイオンと呼ばれる皇帝のための神殿が紀元一世紀ごろに建設されている。神域の内部には皇帝家や様々な神話を模したレリーフ・パネルが飾られ、これによって、皇帝家の威光、およびその神的イメージが想起されたと考えられている。その他、セバステイオンをはじめとする都市内部の各所からは、皇帝家の人物の立像や彼らに対する奉獻碑文が確認され、多様なかたちで皇帝崇拜の痕跡が確認される。

この皇帝崇拜と、ギリシア世界における剣闘士競技、すなわち「ローマ風競技」は、実は密接な関係にあった。というのも皇帝崇拜の実践の一つとされるのが、皇帝崇拜祭司による剣闘士競技の開催だからである。多くのギリシア都市では、

都市の皇帝崇拜祭司 (*αὐτοκρατορικός ἱερεὺς*) が競技開催を担っていたことが碑文から確認される。さらに都市を超えて、属州レヴェルの皇帝崇拜祭司 (*αὐτοκρατορικός ἱερεὺς ἀρχαίου τοῦ Ἰαλίου*) も設置されていた。<sup>⑧</sup> ハドリアヌス帝の手紙を刻んだアフロディシアス出土の碑文には、この皇帝崇拜祭司と剣闘士競技の関係が如実に表れている。以下にその史料の該当箇所を訳出しよう。

「あなたがたが水道のために確保した資金を私は確認する。皇帝崇拜祭司職に推薦されたものの、それを引き継ぐことができないという者がいるので、彼らがレイトウルギアを引受け、その事態を避けることができるのか、もしくは彼らが真実を述べているのかを調査しよう、あなたがたに委託した。しかしながら、もし彼らのうちいくらかの暮らしむきが良いようであるなら、彼らがまず皇帝崇拜祭司に就くことが妥当である。私は次のことを認める。あなたがたは、剣闘士競技開催の代わりに、皇帝崇拜祭司から資金を得るべきであると。そして、私はあなたがたの提案を認めるばかりでなく賞讃する。」<sup>⑨</sup>

まず、皇帝はアフロディシアスにおける水道建設資金を確認し、その上で、同市における皇帝崇拜祭司の後任問題について言及している。この手紙がどのような経緯でしたためられたかが不明であるので、後半部分とのつながりがややわかりにくい。結果的に、剣闘士競技の開催費用を水道建設費用に転用することを皇帝が承認している。この史料について最初に分析を行った J・レイノルズは、水道建設費が剣闘士競技開催費よりも高額であるという解釈に基づいて、アフロディシアスは経費節約のために水道建設よりも剣闘士競技を本来希望していたという見解を示している。<sup>⑩</sup> これに対して、K・H・コールマンはアフロディシアスにおいて祭司職に就きたがる人がいないということは剣闘士競技開催という恩恵施与に関わる負担の大きさに原因があったという立場を採用し、剣闘士競技のための費用が高額であることを示して、彼らにとって水道建設はむしろ積極的解決策であったとみている。<sup>⑪</sup> これらの見解の対立軸は、水道建設と剣闘士競技開催と、どちらの費用を高く見積もるかであるが、現段階の史料状況からは明確なことはわからない。祭司職の人材不足について

もその実態は定かでないが、少なくともアフロディシアスがそのような訴えをなし、競技開催費の転用について皇帝に許可を求めたことは確かである。すなわち、都市における剣闘士競技開催に関する問題について、皇帝の意見を請うほどに、アフロディシアスは剣闘士競技と皇帝の結びつきを確固たるものとして認識していたのである。<sup>⑤</sup> 剣闘士競技によって、どれほど皇帝の結びつきが想起されたかについては慎重になる必要があるが、皇帝崇拜祭司に多大な経済的負担を課すほど大規模な催しであること、そして剣闘士競技が都市内外の人々を多数引きつけた可能性があることを考慮すると、同競技の開催は、都市レヴェルでも重要な皇帝崇拜実践の一つであったと考えられる。

ハドリアヌス帝の手紙以外にも、皇帝崇拜祭司と剣闘士競技の強固な結びつきを示唆する史料がアフロディシアスには存在する。そもそも、競技者である剣闘士の確保は、二世紀の法学者ガイウスが示唆しているように、一般的に剣闘士を養成する興行師と開催責任者（おそらく皇帝崇拜祭司）との交渉によって果たされた。どの程度実態が反映されているかは不明であるが、ガイウスによると、剣闘士は基本的にリース契約であった。剣闘士一人当たりのリース料は約二〇デナリウスであったが、この値段は競技の結果、すなわち競技後の剣闘士の状態によって左右された。すなわち、競技後、剣闘士が無傷であれば、それはリース契約のまま、つまり二〇デナリウスままであったが、剣闘士が負傷、あるいは死亡してしまった場合はリース契約から売買契約に変わってしまい、支払額は五〇倍の一〇〇デナリウスまで跳ね上がることになったのである。<sup>⑥</sup> かかる制度のもとに剣闘士を確保することが通例だったが、アフロディシアスでは興行師を介すことなく、皇帝崇拜祭司自身が剣闘士たちを管理していたことが三点の記念碑から確認される。一七七年に出された剣闘士競技の価格制限に関する元老院決議には、「興行師らと交渉しない属州の祭司もいた」と記されている。<sup>⑦</sup> 二世紀末ごろ、小アジア西部の都市ペルガモンにおいて、剣闘士養成所の医師として活動していたガレノスも、皇帝崇拜祭司から剣闘士の治療を託されたことを伝えている。<sup>⑧</sup> したがって、一部の属州、あるいは都市においては、祭司職就任と同時に剣闘士の一団を引き継ぎ、自らが競技開催の役目を果たした後は、後継の祭司に再びその一団を引き渡していたことが推測される。結

局、祭司らが剣闘士の維持費を負担することになるので、かかる方策を採用することによって、アフロデシアスの祭司の経済的負担が軽減されたかは不詳であるが、剣闘士を自らの都市で管理することで、より確実に剣闘士を確保しようとする姿勢は少なくとも読み取れるだろう。

剣闘士競技の競技者のほとんどは、奴隸や罪人、あるいは戦争捕虜であったため、「ギリシア風競技」のように彼らの勝利に対して、少なくとも都市側が名誉を付与することはなかった。アフロデシアスにおいて、剣闘士の墓碑が二〇点ほど出土しているが、都市によって名誉を付与されている剣闘士は皆無である。他方、アフロデシアスでは確認されないものの、他都市では同競技を開催した皇帝崇拜祭司に対する顕彰碑文が多数出土している<sup>④</sup>。このように名誉の対象として開催者に力点が置かれていたことから、先程言及したように、都市という集団レベルで皇帝崇拜を實踐するという点で、競技開催そのものに重要性があったと考えられる。

したがって、皇帝崇拜がギリシア都市の側から開始され、しかもそれが競争的に行われていたこと、都市レベルの皇帝崇拜実践として剣闘士競技開催そのものが大きな重要性を占めていたこと、さらに前節において確認したように、ローマの権威が都市間競争に貢献する側面を有していたこと、以上を勘案するならば、都市内外の人々を多数引きつけていたと思われる剣闘士競技もまた、「ギリシア風競技」同様、ローマ中央との関係強化という点で、都市の名声を高めるものとして開催されていたと考えられるのである。

- ① *IAbh2007*. 12. 920 = *IAG*. 72.
- ② *IAG*. 66: 69-71; 74-76; 78-79; 84; 87-88; 90; *I Ephesos* 1615.
- ③ *Suet Dom.* 4. 4.
- ④ M. Wistrand, *Entertainment and Violence in Ancient Rome: The Attitude of Roman Writers of the First Century*. Göteborg, 1992, pp. 48-54.
- ⑤ Mitchell [1993a], pp. 218-225; van Nijf [1999], p. 188.
- ⑥ *SEG* 38. 1462, ll. 1-4; 93-95. Cf. Worrie [1988], pp. 172-182.
- ⑦ *IAbh2007*. 12. 36.
- ⑧ *IAbh2007*. 12. 538.
- ⑨ König [2005], p. 164f.
- ⑩ *IAbh2007*. 12. 719.

- ① *IAPH2007*, 12, 27; 12, 920; 15, 327.
- ② F. Millar, *The Emperor in the Roman World (31 BC-AD337)*, Ithaca, 1977, pp. 456-460.
- ③ H. W. Pleket, "Some Aspects of the History of the Athletic Guilds", *ZPE* 10 (1973), p. 226f.; Millar [1977], p. 461.
- ④ Pleket [1973], p. 208.
- ⑤ S. Aneziri, "World Travellers: The Associations of Dionysiac Artists", in R. Hunter and I. Rutherford (eds.), *Wandering Poets in Ancient Greek Culture: Travel, Locality and Pan-Hellenism*, Cambridge, 2009, p. 221.
- ⑥ Aneziri [2009], p. 223.
- ⑦ van Nijf [1999], pp. 186-188; König [2005], p. 213f.
- ⑧ C. P. Jones, "A New Lycian Dossier Establishing an Artistic Contest and Festival in the Reign of Hadrian", *JRA* 3 (1990), p. 487f.
- ⑨ キーノートとユダヤ教'ローマの神殿と東方の諸神について' Plut. *Mor.* 813D.F. 和訳註。
- ⑩ Mitchell [1990], p. 191.
- ⑪ Suet. *Aug.* 98.
- ⑫ Cass. Dio 51, 20, 6-8; Suet. *Aug.* 52.
- ⑬ S. R. F. Price, *Ritual and Power: The Roman Imperial Cult in Asia Minor*, Cambridge, 1984, pp. 235-248.
- ⑭ T. Fujii, *Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus*, Stuttgart, 2013, pp. 95-110; 157-160.
- ⑮ 「神龕守り」に關する『イタリヤ』Burrell [2004]; Heller [2006], pp. 163-237. 和訳註(『イタリヤ』)。
- ⑯ Tac. *Ann.* 4, 55-56.
- ⑰ Ratté [2002], pp. 17-19.
- ⑱ アプロロヒニアスのサビステイオン' 塔と浴場のヘリーノタビに關するイタリヤ' R. R. Smith, "The Imperial Reliefs from the Sebasteion at Aphrodisias", *JRS* 77 (1987), pp. 88-138. 和訳註(『イタリヤ』)。
- ⑲ *IAPH2007* 1, 102; 174; 2, 110; 4, 201; 8, 211; 233; 236; 708; 9, 1; 25-26; 37-38; 40; 112; 119; 11, 104; 12, 108; 305; 314; 326; 514; 515; 614; 641-643; 902.
- ⑳ Price [1984], p. 89. 和訳註' 帝國西方における皇帝崇拜と劍闘士競技の結合' の要約(『イタリヤ』) 佐野光直「皇帝礼拝と劍闘士競技」『古代文化』六十二—三(二〇一〇年)七八—八九頁がある(『イタリヤ』) 和訳註(『イタリヤ』)。
- ㉑ "σάραρχης" 及び "ἀρχιερέως τῆς Ἰατίας" について 同の役職である(『イタリヤ』) 和訳註(『イタリヤ』) 佐野光直「皇帝礼拝と劍闘士競技」『古代文化』六十二—三(二〇一〇年)七八—八九頁がある(『イタリヤ』) 和訳註(『イタリヤ』)。
- ㉒ Deninger, *Die Provinziallandtage der römischen Kaiserzeit von Augustus bis zum Ende des dritten Jahrhunderts n. Chr.*, München, 1965; R. A. Kearsley, "Asiarchs, Archiereis, and the Archiereiai of Asia", *GRBS* 27-2 (1986), pp. 183-192; M. D. Campanile, "I sommi sacerdoti del kohon d'Asia: numero, rango e criteri di elezione", *ZPE* 100 (1994), pp. 422-426; S. J. Friesen, "Asiarchs", *ZPE* 126 (1999), pp. 275-290; M. J. Carter, "Archiereis and Asiarchs: A Gladiatorial Perspective", *GRBS* 44-1 (2004), pp. 41-68. 和訳註' 皇帝礼拝と劍闘士競技' G. Frija, *Les prêtres des empereurs: le culte impérial civique dans la province romaine d'Asie*, Rennes, 2012. 和訳註(『イタリヤ』)。
- ㉓ *IAPH2007* 11, 412, II, 31-38.
- ㉔ J. Reynolds, "New Letters from Hadrian to Aphrodisias: Trials, Taxes, Gladiators and an Aqueduct", *JRA* 13 (2000), pp. 5-20.

- ② K. H. Coleman, "Exchanging Gladiators for an Aqueduct at Aphrodisias (SEG 50. 1096)", *A Class 51* (2008), pp. 31-46.
- ③ M. D. Campanile, "Noterelle ai nuovi documenti da Afrodisia", *ZPE* 135 (2001), pp. 136-138
- ④ *Gal. Inst.* 3, 146.
- ⑤ *IAPH2007*, 4, 104; 11, 507; 12, 1211.
- ⑥ *ILS* 5163 l. 59: "sacerdotes quoque provinciarum, quibus nulla [m cum lanisti] s nego [tin] m e [ni] t" 「リシア風競技の司祭」
- M. J. Carter, "Gladiatorial Ranking and the SC de Pretiis *Gladiatorum Minuendis* (CIL 2. 6278=ILS 5163)", *Phoenix* 57 (2003), pp. 83-114 ※参照
- ⑦ *Gal. Comp. med.* 3, 2, 1 「簡所」 ※参照
- Claudian Galeni opera omnia*, 13, Hildesheim, 1965, p. 600a-b-4.
- ⑧ *IAPH2007*, 8, 505; 701; 10, 101-102; 11, 501-503; 12, 13; 12, 15-16; 615; 621-622; 13, 123; 304; 14, 8-10; 15, 225; 279-280.
- ⑨ Carter [1999], pp. 298-390 「参照」

### 結びにかえて

アフロディシヤスにおける「ギリシア風競技」は、元首政期の小アジアで苛烈を極めていた都市間競争の手段として、都市の名声を高める役割を果たしていた。また、同競技に見出される、皇帝を主とするローマ中央との関係を示す要素は、同競技にローマの権威を付与する点で都市間競争に貢献するものとして、都市側によって積極的に取り込まれていた。同様に、ローマ中央との関係を象徴する剣闘士競技も都市の名声を高めるのに貢献したと考えられる。イタリアのポンペイにおいて、剣闘士競技の最中に、些細な小競り合いからポンペイ市民と近隣のヌケリア市民との間で騒擾が発生したように<sup>①</sup>、見世物は集団的都市アイデンティティが表出しやすい空間であった。このように、開催都市の人々のみならず、他共同体の人々をも包含するかたちで見世物が催されていたからこそ、「ギリシア風競技」と剣闘士競技に代表される「ローマ風競技」は、都市間競争という共通の文脈において相補的な関係にあったのである。アフロディシヤスが両競技をどの程度、意図的に使い分けていたかは史料的に明らかではないが、いずれにせよ、先行研究も言及する都市間競争という背景を念頭に置かならば、従来、別個の枠組みにおいて語られてきた両競技は、都市間競争の手段たる、ローマ中央との関係構築という共通の機能を果たしたのである。まさにこの点こそ、両競技を分化させてきた従来の研究からもれ落



ちた、ギリシア都市における見世物の一実態なのである。

かつて、F・ミラーは、ローマ期のギリシア都市を、単にローマと対置されるものではなく、様々なローマの要素が混合したものとして理解すべきと主張した<sup>②</sup>。剣闘士競技がギリシア人の間に浸透し、ローマの権威についてもギリシア都市同士の競争手段の一つとして用いられていたという点で、本稿はミラーの主張を補強するものであるが、それはあくまで形式的なレヴェルにとどまる。本稿の分析から明らかとなるのは、少なくとも見世物という文化的領域において、皇帝崇拜などによりローマに対して巧みに服従の意を示しながらも、その権威を利用し、自らの都市の名譽に結びつけようとするギリシア都市の姿である。かかる本稿の成果をもとにすれば、近年の研究が示そうとしているように、帝国の支配下にはありながらも、従来想定されてきたほどに自立性を失うことなく、都市としての活力を根底に維持し続けていたというギリシア都市の豊かな像を描くことが可能となるだろう。

本稿の結論は、アフロデイスiasという一都市の分析を中心に導き出されたものである。この結論をどの程度一般化できるかという問題は残るが、これらについては事例研究を蓄積するよりほかはない。加えて、第二章第三節でも述べたように、都市間競争の手段は見世物に限られず、実に多様であった。それゆえ、見世物という手段によって求められた都市の名譽以外の利益、および見世物以外の競争手段の分析を通して比較することで、本稿の検討によって得られた見解を競争社会というギリシア世界の文脈全体に位置づけてゆかねばならない。ギリシア都市の間における競争、およびそこにローマがいかに関わっていたかを解明することで、ローマ帝国下におけるギリシア人の実態、さらにはローマ帝国の支配そのもののあり方が浮き彫りになると筆者は考える。以上の課題については他日を期したい。

① Tac. *Ann.* 14. 17.

② F. Millar, "The Greek City in the Roman Period", in M. H. Hansen

(ed.), *The Ancient Greek City-State*, Copenhagen, 1993, pp. 232-260.

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

Spectacle and City in Roman Asia Minor:  
A Case Study of Aphrodisias

by

MASUNAGA Masataka

In Roman Asia Minor, which has recently been the focus of many researchers, an "agonistic explosion," which refers to the sudden increase in competitions as spectacles, occurred. In this paper, I take up this historical phenomenon in an attempt to consider spectacles in Asia Minor as a point of intersection between Greek and Rome in the regional and empire-wide context and then to clarify the actual condition of a Greek city under Roman rule.

Formally, spectacles in Roman Greek cities are divided into two types, on the one hand, "Greek games," which had been held since the Classical period, and on the other hand, "Roman games," especially gladiatorial competitions, which had been brought from Italy. Previous studies also have distinguished their subject matter based on this categorization. So the two types of the games have been understood as separate. While "Greek games" contributed to an emphasis on Greek identity, "Roman games" were a point of cultural contact between Greek and Rome where both values were assimilated. But if we consider the common feature of spectacle as a place which people from inside and outside a community met, we should examine the two games together. Concentrating on the common element of spectacle, this article approaches the reality of spectacle in a Greek city that has previously been overlooked, by focusing on Aphrodisias, a city of southwest Asia Minor, as a case study.

Firstly, I investigate people from other cities who gathered for spectacles in Aphrodisias on the basis of seat inscriptions that were discovered at buildings used for spectacles in Aphrodisias and honorific inscriptions concerning joint sacrifice accompanying the spectacles. As a result, I point out that people of neighboring cities assembled there. However, this is not the only relationship among cities that can be seen in these spectacles. Of the honorific inscriptions for "Greek games" competitors, certain ones list

festivals of other cities at which the honored competitors had triumphed. Analyzing comprehensively the festivals that were listed on the inscriptions from Aphrodisias, the cities from the province of Asia, and the cities from the province of Achaia, we discover that, just as in the other cities of the province of Asia, the largest number of festivals mentioned in inscriptions from Aphrodisias are from the province of Asia, to which Aphrodisias herself belonged, but the rate of festivals of Achaia is smaller than the other cities of the province of Asia. To sum up, considering the regional context of intercity rivalry in Asia Minor and subjective nature of the involvement of the city in honoring the competitors, it becomes clear that the "Greek games" of Aphrodisias functioned as a method for inter-city competition in the respect that the honoring of outstanding competitors with inscriptions was connected with the honor of the city.

In addition, the "Greek games" were related in various ways to the Roman authorities such as the emperors or the officials of the city of Rome. Generally, these have been recognized as one of the ways that Greek cities proved their loyalty to Rome through the imperial cult, but since Aphrodisias at least appealed to other cities to recognize the authority of Rome, as can be seen in its "Archive Wall," we can also see elements in the "Greek games" that suggest a similar connection with the authority of Rome.

The imperial cult by which many cities subjectively constructed a relationship with the Roman authorities was initiated by the Greeks themselves and was later practiced competitively. In fact, it was the gladiatorial games that were deeply related to the imperial cult. By the inscriptions from Aphrodisias, we can perceive how the gladiatorial games were important for the imperial cult at the city level. As I have already pointed out, the prestige of Rome contributed to inter-city competition and these popular games also served to improve the honor of the city by reinforcing the relationship with the Roman authorities.

Consequently, it was precisely because the spectacles that they held included people of other communities that both the "Greek games" and "Roman games" served in common as a method for competing cities to construct a connection with the Roman authorities. This paper clarifies the picture of Greek cities that at least in the sphere of spectacles attempted to demonstrate their loyalty to Rome and use its prestige as a link to their own honor. The result of this study will undoubtedly provide help in creating a dynamic portrait of Greek cities in the Roman period as other recent studies have attempted to do.